

沖縄県竹富島における観光文化に関する考察

～インタビュー調査を通して～

谷 沢 明

はじめに

本稿は、愛知淑徳大学助成研究「集落及び都市景観形成に関する研究」(平成19、20年度)に関連して行った、沖縄県八重山郡竹富町竹富島の伝統的集落景観を観光資源として活かした地域社会の魅力の創生とその継承の在り方について、観光文化の振興という視点から考察するものである。

昭和62年、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された竹富島の集落は、現在、その歴史・風土に根ざした環境を観光資源として、年間約44万人の観光客を集める観光地として成り立っている。島民により守り伝えられてきた白砂を敷き詰めた街路、珊瑚礁の石垣に囲まれた赤瓦の民家が建ち並ぶ集落景観は、周囲の自然景観(珊瑚礁の海や集落内の樹木と花)、伝統工芸(ミンサー織り等)、伝統芸能(種子取祭等)と一体となって島の魅力を醸成し、それを守り伝えようとする人々の心意気に支えられ、吸引力のある観光地の一つのモデルとなっている。

観光文化とは観光がつくり出す文化をさす言葉で、観光とは国の光を観ることが本来の意味とされている。すなわち、地域社会の「光」、「宝」を見つけ出し、それを味わう行為が、観光の在るべき姿と捉えることができよう。そして、観光地には訪れる人、それを迎え入れる人がおり、両者の相互関係と営為により観光文化が形成される。この観光文化の在り方を理解するためには、観光を取り巻く人間の行動に注目を払いつつ、観光地としての地域社会の実態を捉えていくことが必要となろう。

竹富島を何度か訪れて気付いたことは、島の魅力は、集落の歴史的景観、それを取り巻く周囲の自然環境、伝統工芸・伝統芸能の伝統文化だけに止どまらず、島を訪れる人とそれを迎え入れる人が交流してかもし出す独特な空気が大きな要素をなしている、ということである。

その空気がいかにして生み出されたかを探ることは、竹富島における観光文化を語る上で極めて大切な視点である、と私は考えている。しかし、その空気を主観的に捉えることができても、これを客観的に整理することは極めて困難な作業といわざるを得ない。

竹富島には、島を訪れて大きな感動を得て帰っていく観光客が少なくない。また、リピーターとして島を訪れ、観光業を手伝いながら1年程度の期間で島に滞在する人も多く見られる。さらには、島の魅力に取り付かれ、島の人と結婚して島に永住する人も少なからずいる。そして、それらの人々が相互に交流しながら一つの島の空気を創り上げている。それは、一つの観光地におけるユニークな現象として捉えることができるのではないか。

それぞれの経歴を持つ人々が島にどんな思いに関わりをもち、そこで何が生み出されていく

のであろうか。この課題にインタビュー調査を通して接近してみたい、と考えた。以下、島のあらましと観光地としての性格を述べ、島に思いを寄せる人々へのインタビュー調査結果を整理・考察することを通じて、竹富島の観光文化の在り方の一端を浮かび上がらせることを試みたい。

1、竹富島の概要

竹富島は、沖縄県先島諸島の南西部に位置する八重山列島にある周囲9.2km、面積約5.4km²、最高点標高24mの楕円形をした平坦な島である。島の地質は、大部分が琉球石灰岩から成り、周囲を珊瑚礁が取り巻いている。海岸線には、防潮・防風林が発達し、島の中央に三集落（東集落・西集落・仲筋集落）が隣接して立地し、集落を取り囲む形で農地・樹林地が広がっている。

竹富島には169世帯、345人が居住している（平成20年10月）。琉球石灰岩で形成された島は水に不自由をきたし、稲作は不可能であったため、かつては麦・芋・豆などを自給するとともに養蚕を行って暮らしを立ててきた。なお、島民が稲作をまったく行わなかったのではなく、西表島に農地を求めて由布島に出作小屋を建てて、稲作を行ってきた歴史もあった。

現在の竹富島の産業別就業者数（平成17年国勢調査）は189人で、内訳は第1次産業18人（9.5%）、第2次産業13人（6.9%）、第3次産業158人（83.6%）となっており、第3次産業の中でも飲食店・宿泊業59人（31.2%）、サービス業50人（26.5%）が高い構成比を示している。この統計資料から分かるように、現在の竹富島の主産業は観光業であり、島内には民宿・旅館13軒、土産物店9軒、食堂・喫茶店9軒を数える。また、水牛車による観光業を営む業者2軒があり、19頭の水牛がいる。ほかにレンタサイクル店もあり、798台のレンタサイクルがある（平成20年10月）。

竹富島への観光客入り込み数は、平成元年は86,721人であったが、平成3年に10万人台、平成11年に20万人台を突破し、平成14年は299,232人、平成19年は443,656人と急増している（八重山要覧・平成19年度版）。ちなみに、平成19年の観光客数は沖縄県全体で5,869,200人、八重山圏域（石垣市・竹富町・与那国町）で787,520人を数えており、沖縄県を訪れる観光客の7.6%、八重山圏域への観光客の56.3%が、人口わずか345人の竹富島を訪れていることは、竹富島が観光客にとっていかに魅力的な場所であるかを如実に物語っている。

2、観光地としての性格形成

沖縄県の観光産業は、昭和47年の本土復帰とともに著しい発展を遂げたことは周知のとおりである。ちなみに、昭和47年に443,692人であった沖縄県への観光客数は、平成19年には5,869,200人を数えており、35年間で13.2倍の増加をたどっている。本土復帰を数年後に控えた竹富島では、石垣島在住者により、島南部の土地の買占めが行われた。また、復帰直前の昭和46年、本土企業により、島の東部の土地13.5haの買占め騒動が起こった。外部資本による開発行為が行われようとしたのである。これらの買占めに対し、竹富島島民は昭和46年に「竹富島を守る会」を結成して前者に対抗し、昭和47年には「竹富島を生かす会」を結成して本土企業からの土地の買占めに立ち向かった。

自然景観、歴史的環境に恵まれ、観光地としての資源を持つ竹富島は、本土復帰に伴い、このような試練が待ち受けていたのである。この試練を乗り越えて島民の間に形成された合意は外部資本を島に入れたいというものであり、それが、その後の竹富島の自律的な観光地としての性格を規定していく。

竹富島の地域の価値を再認識するきっかけとなったものに、昭和51年、観光資源保護財団が行った調査があり、その成果は『竹富島の民家と集落—景観保全と観光活動に関する報告—』として刊行された。この調査により、竹富島の伝統的な集落景観の価値が島民をはじめ外部にも広く認められるようになった。ところが、その後しばらく集落保存の動きは起こらなかった。保存の動きが起こったのは昭和57年からである。この年、竹富島は、全国町並み保存連盟に加入し、集落保存の在り方を模索する。沖縄県はこの動きを支援し、昭和57、58年度の2ヵ年にわたって竹富島の島民を町並み保存の先進地として知られる長野県妻籠宿に派遣するとともに、昭和59年度には「沖縄県集落景観保存調査」を実施する。また、昭和59年には妻籠宿の人たちが竹富島を訪れ、伝統的な町並み景観を持った地域間の交流が始まり、この交流は今も続いている。

このような気運の盛り上がりの中で、昭和61年「竹富町歴史的景観形成地区保存条例」が制定され、同年「竹富島憲章」が「公民館議会」において決議された。続いて公民館会で満場一致で承認された。公民館は、島の自治的組織の拠点である。「公民館議会」とは聞きなれない呼称であるが、いわば、自治会の会合といった性格をもっており、その決議事項は、島で絶大な力をもっている。また、時には町行政と対抗することもある。

「竹富島憲章」には、観光地・竹富島の性格をこれからいかに形づくっていくかという意思が明瞭にあらわれている。憲章は、①保存優先の基本理念、②美しい島を守る、③秩序ある島を守る、④観光関連業者の心得、⑤島を生かすために、⑥外部資本から守るために、から構成されている。この中で柱になる「保存優先の理念」は以下の5項目である。

- ①売らない：島の土地や家などを島外の者に売ったり、無秩序に貸したりしない。
- ②汚さない：海や浜辺、集落など島全体を汚さない、また汚させない。
- ③乱さない：集落内、道路、海岸などの美観を、広告、看板、その他のもので乱さない。
また、島の風紀を乱させない。
- ④壊さない：由緒ある家や集落景観、美しい自然を壊さない。また、壊させない。
- ⑤生かす：伝統的祭事行事を、島民の精神的支柱として、民俗芸能、地場産業を生かし、島の振興を図る。

この「竹富島憲章」は、妻籠宿の住民憲章「売らない・貸さない・壊さない」に影響を受けたものである。妻籠宿の「売らない・壊さない」に加え、ここには「汚さない、乱さない、生かす」がうたわれている。ところが、「貸さない」は、「竹富島憲章」に入っていないことが注目される。すなわち、そこに他所からの人を積極的に竹富島に受け入れ、その力を活用して地域を創っていくという意思を読み取ることができるのである。

竹富島の集落景観を特色付け、観光客を魅了する赤瓦の家並みの形成は、じつは、さほど古いことではなかった。竹富島で最初の瓦葺き民家が建てられたのは、家屋制限令が撤廃された16年後の明治38年のことであり、それ以前は茅葺き民家が建ち並ぶ集落景観であった。赤瓦の

家並みで印象付けられる風景は、一度、塗り変えられたものである。

竹富島が属す竹富町には、ほかにも西表島、小浜島、黒島、波照間島などの離島があるが、いずれも島の性格は異なっている。西表島は亜熱帯の大自然を味わう観光業、小浜島と波照間島はサトウキビ栽培、黒島は肉牛飼育を主産業として生活を立てているところである。他の離島を歩いて気付いたことは、黒島の一部集落を除いてほとんど赤瓦の伝統的な集落景観が残っていない、という事実である。

沖縄の伝統的な木造家屋は、台風やシロアリの被害から、戦後、その多くが鉄筋コンクリート造りに変わっていった。西表島、小浜島、波照間島を歩くと、そのことがよく分かる。ここで考えてみたいのは、なぜ、同じ風土条件の中で竹富島に赤瓦の伝統的な家屋が群として残され、それを守っていかうとする意識がどのようにして育まれてきたかの背景である。

竹富島は、いまでこそ赤瓦の伝統的な集落景観が注目されているが、はじめは「民芸の島」としてその名を知られるようになったところである。昭和32年、倉敷民芸館の外村吉之介が竹富島を訪れ、伝統工芸を全国に紹介したのが契機であった。そして、ミンサー織りを中心とする島の伝統工芸は、竹富民芸館を拠点とした活動を通じて今日に生き残った。また、作家の岡部伊都子が竹富島を訪れて島民と交流を持つようになった。昭和47年、岡部伊都子は書斎として使っていた赤瓦の建物を島の図書館として寄贈するが、その志は今も「こぼし文庫」として受け継がれている。このように文化人が島に関わりをもち、その交流により育まれた意識の高さが、島民が自らの文化の見直しを含めて、文化的なものに関心を寄せる背景の一つになっている、と捉えることができはしないだろうか。さらに、日本最南端の浄土真宗布教所である喜宝院住職を務めた上勢頭亨は、島の民俗資料を収集し、昭和38年に喜宝院蒐集館を設立するが、その活動は島の文化を見据え、島民の誇りを醸成する上で大きな役割を果たしたことも見落としてはならない。

そのような背景は、日本で最初に町並み保存を手がけた長野県妻籠宿と共通する点が少なくない。すなわち、妻籠宿では疎開していた文化人と地域住民の交流により文化的関心が芽生え、その流れの中で起こった「宿場資料保存会」の活動が、やがて町並み保存を呼び起こし、「妻籠を愛する会」の結成につながっていくというプロセスを思い起こすのである。

もう一つは、無形文化としての伝統芸能の存在も見落とすことができない。竹富島には、昭和52年に国の重要無形民俗文化財に指定された種子取祭を受け継がれている。種子取祭は、10日間にわたって行われる粟を中心とした五穀豊穰祈願の祭りである。うち二日間は、島民により踊り、狂言、組み踊りなど数々の芸能が奉納され、島を挙げての祭りとして知られている。この祭りに寄せる島民の思いはことのほか強いものがあり、種子取祭を通じて島民の心の絆が培われている。さらに、島には「うつぐみ」という精神が根付いている。これは、一致協力してことに当たるというもので、それが何物にも勝っているという共通意識が島民の間に脈々と流れている。

これら種々の有形・無形文化をバックボーンとした島民の誇りが、他に類を見ないユニークな観光地・竹富島の性格を形づくり、その魅力を全国に発信し、多くの支持者を惹きつけている、と私は捉えている。

3、初めて訪れた人が島で感じたもの

平成20年9月、愛知淑徳大学学生19名（2年生）を引率して竹富島を訪れ、4泊5日のフィールドワークを行った。竹富島で行ったフィールドワークは、集落を歩いて伝統的な集落景観を探り、海岸線を歩いて自然景観に触れ、10ヵ所の御嶽に参って島の精神文化を学び、3名の方（喜宝院蒐集館長の上勢頭芳徳氏、竹富小中学校校長の石垣安志氏、島の伝統的な生活についての伝承者である古堅節さん）から話を伺うという内容であった。このプロセスの中で、初めて竹富島を訪れた学生たちが島をどのように捉えていったかを整理することを通じて、竹富島に潜む魅力を浮かび上がらせてみたい。

まず、「竹富島の第一印象は？」という質問に対する学生のいくつかの回答を紹介しよう。

「白砂を敷きつめた道、こりゃ何だ！それが第一印象。白砂ってこうなんだ。島ぞうりでないと靴に砂がいっぱいはいっちゃう。ブーゲンビレア、本島でもいっぱい見たけれど、咲き方が半端じゃない。そんな島が竹富島」（近藤亜祐美）。

「集落が見えてくるとワクワクした。花がいっぱい咲いている。白砂が綺麗に敷き詰めてある。歩いていても本島とは空気がまるで違う。このギャップは何だろう。こういう空気って何なんだろう、とハイテンションになった」（福本かおり）。

「ここ、どこだろう！それが第一印象。沖縄というと、本島のイメージが大きい。写真で見たはずなのに、思った以上に、強烈な色が目に飛び込んできた。写真では感じられない空気、風、匂い、音、感触。これが一気にきたので、異空間に飛び込んだようであった」（森下愛子）。

「第一印象は、まずびっくり。アスファルトの道路や、看板からさまざまな情報が溢れている街を見慣れていると、竹富島はまるで異空間といった感じ。木の緑、民家の赤瓦と、鮮烈な色がバーンと迫ってくる」（芳永美咲）。

咲き乱れるハイビスカスやブーゲンビレア、目にまぶしい白砂の道、木々の緑、赤瓦の民家、風、匂いが一体となって醸し出す島の空気（雰囲気）がまるで異空間のように感じられる場所、それが最初に訪れた学生が竹富島に対してもったイメージである。これは、竹富島を訪れた大半の観光客が最初に受ける印象でもあろう。

次いで、「上勢頭芳徳さんに会って島の見方は変わった？」という質問の回答である。ちなみに、喜宝院蒐集館長の上勢頭芳徳氏は1時間半にわたり、竹富島の伝統文化やその保存について熱く語ってくださった。

「芳徳さんの話し方、すごく楽しそう。竹富島にとってマイナスのことを話すときは悲しい表情。一つ一つの話に表情がある。住んでいる人、島に愛情があるんだなあ、ということが伝わってきた」（近藤亜祐美）。

「芳徳さんは、島の人は何事も一致団結して取り組む“うつぐみの心”を語ってくれた。そういうやさしい気持ちを持った島だから訪れる人がいっぱいいる。来る人もその心で受け入れている。竹富島は、住んでいる人もやさしい島。だから観光客をあたたかく受け入れる。話を聞いて一歩、島の中に踏み込めた、と思った」（福本かおり）。

「芳徳さんは、竹富島が大好きな人。島が大好きな人の話を聞き、歩いていると、どんどん島が好きになっていく。二日目は、島に深入りするワンステップの日だった」（森下愛子）。

「竹富島の第一印象は、テーマパーク。でも住んでいる人に話を聞いてみると、テーマパー

クとは違っていた。この集落を支えている人の頑張りや努力が見えてきた。なごやかな島を創り出している人がいるんだ、ということを実感した」(芳永美咲)。

やさしい気持ちを持った人、島が大好きな人が住んでいる島が竹富島であり、なごやかな島を創り出している人がいるからこそ、訪れる人がいっぱいいる島が竹富島である。学生たちは、島に生きる人に接することにより、より島を理解するとともに、一步踏み込んで島の魅力を受け止めたのである。

さらに、竹富小中学校校長の石垣安志氏、島の伝統的な生活についての伝承者である古堅節さんに会って話を伺うことにより、島への思いはさらに深まっていく。紙数の関係で、一つだけ感想を紹介しよう。

「石垣安志先生や古堅節さんの話を聞いて、子どもたちを地域全体で育てようとしている島だということが伝わってきた。私たちがふだん考えているものとは別の価値を創り出している島、それが竹富島。それを自然に皆で創っていこうという雰囲気とその表情から伝わってきた」(芳永美咲)。

三番目に、「自由行動で島を歩いてどんなことを感じた?」という質問の回答である。島の見所をおさえ、島の方から話を伺うというプロセスを経て、残された一日はこれまでの体験を踏まえて自由行動の日とした。

「砂浜にいろいろ旅で感じたことを書いて遊んだ。砂浜に書いた文字は、すぐに波に消されてなくなってしまった。離島ではボーっとする時間があった。自分って何だろう、将来の自分はどうなっているのだろうか、さまざまなことを考えた」(近藤亜祐美)。

「自由行動の日は、のんびりした一日。その一日があったからよかった。過去の自分、将来の自分について考えた。これから私はどんな人生を歩んでいくのだろうか、そんなこともちょっとだけ考えた。そんな時間は今までの私の生活の中にはなかった」(福本かおり)。

「自分の視点で島を見たいと思って、一人になって別行動をとった。アイヤル浜まで歩いていった。緑の木々が生い茂った道を一人で歩きながらいろいろなことを考えた。島に来ると観光客も優しい気持ちになる、そんな島が竹富島だと思った」(森下愛子)。

「一人で歩いていると、友だちと一緒に歩いている時には見えなかったことが見えてくる。都会だと一人で歩いていると寂しいが、島には、一人で歩いて気持ちがいい場所がいっぱいある。竹富島は、訪れる人に多様な行動ができる場所を提供してくれる。浜辺には小さなヤドカリがいっぱいいてヨチヨチ歩いている。そんな光景を見ていると、私は一人の人間なんだ、ということが実感できた。自由行動の日は、そんなことを感じながら歩いていた」(芳永美咲)。

自分って何だろうと考えさせてくれた島、今までの自分の生活の中になかった時間を提供してくれた島、一人で歩きながらいろいろなことを考えさせてくれた島、人間なんだということが実感できた島、と学生たちはそれぞれ身をおいた島の良さを語っている。観光地としてある地域を見るとき、「見所」「体験する場」のクオリティについて評価されることが多いが、このように「自分を見つめる場」が多様に存在するか否かも、観光地の価値としての重要な要素である、と私は考えている。その場が身近なところに溢れているのが竹富島の大きな魅力である。

他にもいくつかの質問をしたが、最後に「この竹富島の旅は、人生に何かを与えましたか?」と尋ねてみた。その回答を紹介しよう。

「19歳の夏、竹富島で過ごした私。思い返すと何だろう。夢じゃないけれど何だろう。一人で将来のことを考えた。そんな、考えることの大切さを知った島。流され、追われる生活を捨てて、じっくり自分のことを考えて、皆と話すことができた離島の旅であった」(近藤亜祐美)。

「改めて自分を見つめなおし、今後の希望が見えてきた。沖縄は、いろいろなものを取り入れて自分流にこなしてきた。そのように、いろいろな人のやり方を踏まえた上で、自分は自分なりに生きていけばいいんじゃないか、そんなことを竹富島で考えた」(福本かおり)。

「日々変わる海の色は今まで知らなかった。島に来て、自分の見たことのないものが溢れている、と実感した。本当に綺麗なものってなんだろう、そのようなことも考えた。自然があふれているから見えてくるものもあった。花、虫が小さな島で生きている。自然ってすごい。その島に浸って、自分が生きるということをちょっとだけ考えた旅でもあった」(森下愛子)。

「都会とは違った人と人とのふれあいがある島。それでいて、自分ひとりの時間ももてる島。今の私は、周りにある便利な道具に頼って生きている。その自分を、等身大の自分に引き戻してくれた島。自分って小さな存在だなぁ、と気付かせてくれた島、それが竹富島」(芳永美咲)。

流され、追われる生活を捨てて、じっくり自分のことを考えた旅、自分は自分なりに生きていけばいいんじゃないかと考えた旅、生きるということをちょっとだけ考えた旅、等身大の自分に引き戻してくれた旅、と学生たちはそれぞれに竹富島で過ごした日々を振り返っている。

そして、竹富島がもつ価値について、学生たちは「心のゆとりが生まれ、人との関わり、自然との関わりをずっしり受け止められる島」(近藤亜祐美)、「島全体、人とかモノとか全部を包み込むあたたかい空気が流れている島」(福本かおり)、「いろいろなものに出会える島、それが竹富島の宝である」(森下愛子)、「直接、人と話をすることで成り立っている関係、それが竹富島の宝である」(芳永美咲)と結んでいる。いずれも、竹富島の魅力について核心をいい当てた言葉である。

以上紹介した意見は、竹富島がもつ内なる魅力である。その魅力は、そこに身をおいた人間が島と対峙することにより生まれるものであるが、この点を含めて観光地・竹富島の在り方を探っていくことが必要になるのではないか。

4、島に滞在して自分を見つめる人々

私たちが4日間宿泊した民宿・泉屋には、4人の女性が働いている。いずれも島の魅力に惹かれて本土からやってきて、ほぼ1年単位で働いている方々である。最初、彼女たちもまた一人の旅人であったが、現在は、「半島民」として、竹富島の観光業を盛り上げている。このように他所からやってきた人は、泉屋だけでなくほかの民宿、さらには飲食店、水牛車観光業、レンタサイクル店等にも数多くいる。「竹富島憲章」でふれたように、竹富島は他所からの人を積極的に受け入れ、その力を活用して地域づくりを行っている姿がここによく現れている。

泉屋で働いているのは大阪出身の岡田麻実さん、群馬県前橋出身の高橋友美さん、神奈川県藤沢出身の梅井伸子さん、横浜出身の奥崎奈々さんである。ところで、彼女たちは、どのような経緯で島のとりこになってしまったのであろうか。また、島に滞在して生活することにより何が見えてきたのであろうか。それをインタビュー調査で探ることにより、竹富島の姿をより一歩踏み込んで理解してみたい。竹富島滞在中、4人からお話を伺ったが、ここでは紙数の関

係で2名の話を紹介する。

その一人である岡田麻実さん(24歳)が竹富島を訪れたのは、母親といっしょに八重山諸島を巡って竹富島に立ち寄ったのが最初であった。そのときの竹富島は日帰りの旅であった。「何、この島、っていう感じ。風景、すごくきれいだし、白砂が敷いてある石垣の道もよかった。日帰りじゃ知り尽くせないな、今度来るときは、泊まってゆっくりしよう、と思いました」と、麻実さんは第一印象を話す。

その後、毎年、2~3回竹富島に来ていた麻実さんは、平成19年5月、あこがれの泉屋に泊まった。泉屋は、麻実さんの母親が2歳のときに泊まったことがある宿でもあり、その雰囲気魅せられた。「働いてもいいですかと、女将さんに思わず言っちゃった。もしかかしたら秋ころに来ちゃうかもしれません」と、麻実さんはその日のことを茶目っ気たっぷりに話してくれた。秋の種子取祭が近づいた時、泉屋の女将さんが言った。「早くおいで、早くおいで。祭り、見られなくなるよ」と。麻実さんが泉屋に働くためにやってきたのは、種子取祭のときであった。「島の皆さん、踊りやら狂言やら、二日間まるまる踊り狂っていました。来ていきなり、それなんですよ。何、この島!って。都会と違う空気が息づいている島、それが竹富島だと思いました」と、カルチャーショックをかくせなかった。

専門学校を卒業した麻実さんは、アルバイト生活で日々を過ごしていた。「私、自立しなきゃ、と思いました。自分を変えたい、と思うこともありました。自分を追い詰めてやろう!そんな気持ちで泉屋に来たんです。ここで仕事しながら、生活しながら自分を鍛えられたら、と思って来たんです」。それが、麻実さんが泉屋にやってきた動機であった。

「この島に少し住んで見えてきたものは?」と尋ねると、「私、人としゃべっているのが好きなんだなあ、と改めて気付きました。お客さんと楽しそうに会話していますね、と周りの人から言われ、自分では気が付かなかったことがわかりました。そして、島に来て大阪の良さも改めてわかりました。大阪の友だちの大切さもわかりました」と、答えた。また、「竹富島で1年暮らすと言ったとき、親は反対しませんでした?」と質問すると、「勉強してきなさい、と言って送り出してくれました。自立して欲しかったんだと思いますね」と、少しはにかんだ。竹富島は、そのように親も娘を安心して送り出すことができる島なのである。

最後に、「竹富島って自分にとって何?」と尋ねると、「精神的にも、体力的にも私を強くしてくれた島です」と、明快的な言葉が返ってきた。

もう一人の高橋友美さん(23歳)は、平成19年9月に姉といっしょに初めて竹富島を訪れた。「自分たちの住んでいるところではあり得ない風景でした。それを見て感動しました。私の住んでいる群馬は海なし県ですから」と、竹富島の第一印象を話す。

2回目に竹富島を訪れた時に泉屋に泊まって惹かれるものがあった。旅から帰った友美さんは、早速、泉屋に電話を入れて「ここで働きたい」と、頼んだ。しかし、女将から「しっかり考えてからにして」と、言われた。3ヶ月間自分の将来を考えた友美さんは、病院の医療勤務の仕事に区切りをつけて平成20年4月から泉屋で働くことになった。

「縁があったのかなあ、と感じますね。自分を変えたい、私はあまりそんな気持ちはもっていません。これから長く生きる中で、知らない土地で一から暮らす経験は、きっと役立つだろう、そんな思いでやってきました。将来、自分が母親になり、家族を持ったりするときにプラ

スになるんじゃないか、と思って」と、友美さんは泉屋にやってきた動機を話す。

竹富島での生活について尋ねると、「ここで働いている友だちは、朝から夜までずっといっしょじゃないですか。寝るところも一緒。弱い部分を見せるところもあるし、隠せない部分もある。でも、大丈夫。周りの人は、自然体でいてくれる。察してくれる。黙っていてもいっしょにいられる。ここで暮らして、腹を立てるとか、そういう感情がなくなりましたね。竹富にいと、心が広がります。いろんな人に恵まれていますね」と、自分自身を振り返った。また、「ここで働いていると、責任感が強くなりますね。バァちゃんからモノの大切さを教えられました。野菜の皮を上手に剥くことや、余ったものを捨てずにどう使えるか考えることを教えられました。女将の享子さんから、自分の思ったことをきちんと言うことの大切さを教えられました。地元だと自分のことを知っている人がたくさんいるけれど、ここは、周りは知らない人だから、一からきちんと言わないと伝わりません」と、島での生活は教えられることがたくさんある、と答えた。また、娘の様子を見に竹富島にやってきた親から「ここに来て顔つきが変わったね」と言われたことが、友美さんは嬉しかったという。

最後に、「竹富島って自分にとって何？」と尋ねると、「今まで考えもしなかったことを考えるようになりましたね。泉屋に来て、バァちゃんからすごく学んだ。ほんとうに働き者です。なぜ、こんなに働くのだろう、将来、こんなバァちゃんになれたらいい、と思うようになりました。この島に来たのは、私にとってちょっとした人生の変わり目の時だったのかもしれない。竹富島に来て得たものは、決してモノじゃないですね」と、クリクリした目を輝かした。

麻実さん、友美さんともに共通することは、お金に代えられないものがある、それを手に入れようとして竹富島に来たという動機である。そして、島の生活に身をおく中で自分自身を磨いていこうという気持ちを共通して持っていることである。島の観光業は、そのような志を持った人々により支えられ、また、それらの人々が竹富島の気持ちよい雰囲気を作り上げている。これもまた、人の営みとして観光が創りだしている竹富の文化の一側面である、と捉えることができるであろう。

5、島に嫁ぎ、島に貢献しようと決心した女性

「私、レンタサイクル店の嫁です」と、自己紹介をしてくださった友利由紀さんは、東京の下町、木場の生まれである。由紀さんが竹富島のことを知ったのは、漫画『星砂の浜』を読んだ小学生の時であった。いずれ行ってみたいと思っていた。今から14年前、悲しいことがあった。そのとき、由紀さんの頭の中に浮かんだのは、竹富島であった。

「今、行く時だって。空港ととんでいって、竹富島に行きたいんですが、と尋ねました。沖縄ということにはわかっていましたが、どこにあるのが分からなかった。空港の方が、どこにあるか探してくれました。そして、船で行くんですよ、と教えてくれました。飛行機で石垣島まで行き、船に乗り換えて竹富島へ。港から歩いて“星砂の浜”のカイジ浜まで行きました。細い道が浜まで続いていました。浜に出た瞬間、“天国”みたい。“天国”ってあるんだ、と思いました」と、由紀さんは当時のことを回想した。

カイジ浜にオジが座っていた。ここでアルバイトしていきなさい、と声をかけてもらった。1週間の予定の旅行が、半年になってしまった。両親は、1週間の予定で旅行に行っていると

思っていたのに、帰ってこない。この、ゆったりサイクルにはまった由紀さんには、都会での仕事は考えられなかった。しかし、一旦、東京に帰って2年が過ぎた。

「オジギが、竹富において、と言ってくれたので、また来ることになりました。カイズ浜に客を運んでくるマイクロバスの運転手をやっていた主人を見かけていますが、島に癒され状態だったので、その時は、男の人は眼中になかったのですよ。あまり意識してなかったのですが、誕生日にネックレスをもらいました。2回目に来たのは1月でしたが、3月には主人といっしょに住んでいました」。何とも思い通りのよい人である。

友利家では、オバァがレンタサイクル店をやっていた。結婚して、すぐに赤ちゃんができた。そして、子育てをしながら、竹富民芸館で機織を教してもらい、ミンサー織りを習い始めた。「島にゆったり時間が流れていることには変わらないんですけど、島での暮らしは行事に追われ、けっこう忙しいんだ、と思いましたね」。これは、島の住人となった由紀さんのはっとさせられた一言であった。観光客としては見えない部分である。

「竹富の人、口は悪いが、気はいい。島の人、皆家族みたいなものです。プライベートな時間がなくていやだな、と受け取ったらそれまでですけど、困った時には皆から声をかけてもらえて有難い、とプラスに受け取ったらいいんです」。友だちと関わることはあっても、地域の人と深く関わることはないのが都会の生活である。それが島とそれまで住んでいた土地の違いである、と由紀さんは話す。

島での生活について尋ねると、「ここに住んでいますと、お祭や行事に関わらざるをえなくなります。PTAは人数が少ないので、皆でやります。そのうちに家族みたいになりますね。人、それぞれ性格が違って、癖もあります。中には苦手な人もいたりしますけれど…。悩むことも多いのですが、学ぶことも多くあります」と、前向きな生き方が伝わってくる。

下の子が年長になった4年前、由紀さんは、島に伝わる踊りを習うようになった。結願祭で踊りたいと思ったのがきっかけである。また、「島の踊りを習おうと思ったのは、踊りを通して島に貢献したいと思ったからです。子どもたちを育てるのに、いろんな人から援けてもらいました。悪戯をしているときには、叱ってもらったり、と。島に恩返しをしたい、そんな気持ちで踊りを習い始めました」と、島に貢献したいという気持ちを語る。

「島の魅力は？」と尋ねると、「竹富島に暮らして、自然があって自分たちが生かされている、という当たり前のことを実感しますね。海の色、波の模様も毎日違っている。潮の満ち引きを見ていると、地球が生きている、そんなことを感じますね。頭では勉強していたけれど、身体で分かっていた。それが、ストーンと自分の中に入ってきた瞬間というものがありました。ほんとうに自分は生かされているんだ、と体感できますね」と、感性豊かな言葉が返ってきた。「地球が生きている、そんなことを感じますね」とは、何とも鮮やかな一言ではないか。

島の魅力は自然だけではない。「島では、困っていたら助け合い、お互いに話したら分かり合える人間関係ができています。種子取祭の1ヵ月くらい前になると、夜の7時から11時頃まで毎晩練習を重ねます。息を合わせることをやるのです。これが“うつぐみの心”につながっていくのかなあ」と、島の精神とそれが培われた背景にも触れる。話は続く。

「“うつぐみの心”は、観光地化された今、薄れつつあるとは思いますが、種子取祭や

神様に関することでは、今でも生きています。そこで、人間のあるべき関係や、お互いを分かち合うことの大切さを振り返ることができます。自然への畏敬の念をもち、神様からもらった竹富島、地球に感謝を込めて、踊りを踊ったり、また、踊らない人も裏方になって給仕をしたりして、気持ちを一つにして祭りを行います」と、人間のあるべき関係を見つめなおす機会をもつことができる島、それが竹富の良さである、と語ってくれた。

最後に、「ほんとうは、毎日感謝しないといけないんですけど、奉納の時、この気持ちを思い出させてくれます。ありがたい行事だと思っています。竹富島に暮らしていて、感謝ができる時があるって嬉しいなあ、と思いますね」と、話を締めくくった。由紀さんの人柄を彷彿させる言葉ではないか。

6、人生、変えてもいい

喜宝院蒐集館で来訪客に熱く語りかける館長の上勢頭芳徳さん（昭和18年生まれ）は、現在、竹富島の地域づくりをリードしている一人である。「まちづくりには、よそ者・若者・ばか者が必要だといわれますが、私はよそ者です。当時は若者であった。今は、ばか者です。この島に来たのは、沖縄が復帰して間もない1974年。私は、今年で33回忌になります」と、のっけからやられてしまった。「33回忌」とは、よく言ったものである。「竹富島に出会ったとき、それまでの芳徳さんが死んでしまったのですね」と、やっとの思いで言葉を探すと、芳徳さんは目を細めた。

「竹富島は、本土の資本と対決しながら自然と文化を守る運動をやってきました。私は、そこに感激したわけです。それじゃ、何かお手伝いできることがあるのではないかと、思ってこの島に住むようになったわけです。人生、変えてもいい、と思わせるものがこの島にはあったのです」。人生を変えてもいいと思わせる何かがある島、それは深みのある一言である。

「この島が観光地として成り立っているのは、自然環境や伝統文化を大切に守ってきたからです。どうして、きちんと守ることができたかという、それには仕掛けがあります。他所からやって来た人が、ここいいですね、と言って土地を買おうとしても、土地に値段がないのです。島の人が土地を売らないから値段がないのです。土地を売らない、とうたった竹富島憲章があるんです。竹富は、自分の島を大事に守っていこうとする意識が強いところです」。島を大事に守っていこうとする意識に共感した芳徳さんは、長崎県から竹富島にやって来て島に骨を埋めようと決心するのである。

「沖縄が日本に復帰する1972年の少し前のことです。内地の観光資本による竹富島の土地の買占め騒ぎがありました。土地が買われていったら、地域の文化が台無しになる。自分たちがこの土地に居られなくなる。そんな危機感が高まりました。買占め騒ぎがあったものの、さまざまの方が応援してくださり、なんとか竹富島の土地を守ることができました」。大勢の人が応援する中で竹富島が生きている、そのような姿を目の当たりにしたことが芳徳さんの気持ちを不動のものにした。

「島を守るためには理念を持たなければいけません。長野県妻籠宿の住民憲章を参考にしたら、という話があって、この島でも竹富島憲章をつくりました。竹富島では、妻籠宿の住民憲章にある“貸さない”は省きました。当時、島には空き家がたくさんありました。島の力になっ

てくれる人には空き家をどんどん貸して、いっしょに頑張りましょう、と考えたんです」。この言葉に、竹富島が選んだやり方の背景があらわれている。いかにも南の島らしい開放的なやり方である。

「竹富島の民家は、風土にあった造りをしています。建物は南向きに建ち、風を取り込む開放的な造りになっています。素焼きの赤瓦に降り注いだ雨はじわっと浸み込んだ後に蒸発します。屋根勾配はゆるく、強い風に逆らいません。床は高くして、風通しを良くしています。また、軒や石垣も適当な高さで、自然と折り合いをつけながら暮らしています。自然との闘いの中で風土にあった建物が生き残り、受け継がれてきたのだと思います。そして、五原則を持つ竹富島憲章ができたので、そのような集落の佇まいを残す島をきちんと守ることができたのです」。自然風土にあったものが受け継がれると同時に、そこに確かな人間の意思が働いていることが読み取れる言葉である。

「竹富島憲章にある“生かす”というのは、自然環境や伝統文化を生かし、それを地域に役立てていこうとする考えから生まれました。近年、竹富島ではNPO『たきどん』という組織を立ち上げました。『たきどん』とは、竹富の昔の呼び方です。これは、遺産管理型のNPOです。先輩たちが守って伝えてきた自然環境や伝統文化が観光資源となって、今の私たちの生活があります。これをきちんと次の世代に伝えていこうとする意図でつくったんです」。芳徳さんは、NPO「たきどん」の理事としても活躍をしている。

NPO「たきどん」と沖縄県が共同開発したものに、「素足の旅」がある。竹富島を訪れる観光客の多くは、水牛車に乗ったらすぐ帰ってしまう。滞在時間は、短い人だと、たった1～2時間程度である、という。「ゆっくり島を歩いてもらいたい。できたら島に泊まってもらいたい。そのように思って新たな仕掛けを考えたい」と、その思いを語る。「素足の旅」は、オジィ、オバァのガイドで歩き、途中、伝統的な民家に上がりこんでユンタク（おしゃべり）をする。そんな、土地の風土・歴史・文化に触れる旅の提供を目指した活動を立ち上げたのである。

「このようなことをやりだしたのは、もっともっと竹富のファンを増やしていこうという気持ちがあったからです。竹富の良さを味わった人たちが、やがて竹富をサポートしてくれます。竹富のことだったらほっておけない、と思うファンを増やしたいという気持ちがあります」と、将来を見据えての活動であることを教えていただいた。

「この島を訪れた方は、のんびりしている、時間が止まったみたいだ、とおっしゃいますが、ほっておいてそういったものができるわけじゃないんです。我々は、水面下でもがいているんです、必死になって。この地域をつくってきたお年寄りや、子供たちがゆったりすごせる安心な地域をつくるために、我々現役世代が水面下でもがくことが必要です。もがかなかたら流されてしまう。表に立って、旗振ってワーワーやるのではなく、あくまでの水面下で。いい地域、いい観光地をつくるためには、表に見えないところでしっかり頑張ることが必要です。そこに“うつつみの心”が作用してきます」と、芳徳さんは静かな闘志を燃やしている。

「生物学的なDNAは受け継ぐことはできませんが、文化のDNAは継承することができます。その文化のDNAは、案外、よそ者が見えているのではないか、ということに気がきました。訪れた人たちに島の話をするのは楽しいですよ。振り返ってみると、人生の中で、自分と波長

のあう生き方ができるところと出会えたのは、ラッキーだと思います」と、芳徳さんは竹富島との出会い、そして、その生き方を振り返った。竹富島は、このように男女を問わず人生を変えてしまう魔力を秘めた島でもある。

7、女将の心

泉屋の女将・上勢頭享子さん（昭和32年生まれ）は、もとスチュワーデスの仕事をしていた。出身は岡山市で、泉屋に嫁いで23年になる。初めて竹富島に来たのは、26年前の25歳の時であった。港に降り立ち、ジャングルの中を通り過ぎたら集落があり、亜熱帯植物が咲き乱れていた。「それは清らかな集落でした。“天国”ってこんなところかな、と思いました。昔ここにいた、小さな時からいた、そんな気持ちにさせる島です。とても気持ちが落ち着くところでした」と、享子さんは当時を振り返る。

スチュワーデスという仕事柄、旅費がかからなかったので、休みのたびに享子さんは各地に出かけていたが、やがて、2ヶ月に1回のペースで竹富島に通うようになってしまった。「竹富島に来て2回目に主人と出会いました。そして、主人に会いに来るのが旅の目的になってしまったんです」と、淡々と話す。

出会ったご主人の篤さんは、ダイビングのインストラクターをしていた。当時、泉屋に泊まる人は、ダイバーの常連が多かった。彼らは一人で潜りに行くが、初心者の方の享子さんは、誰かについてもらわないと泳げない。「そして、話をするようになりました。そんなこともあって、この人と生活してみたい、この島で子育てをしてみたい、という気持ちを持つようになったのです」と、結婚することになったいきさつをまるで他人事のように話す。

「主人の素朴な人柄に惹かれました。竹富島に嫁ぐことは、岡山の親にとって心配だったと思います。でも、進路を選ぶ時、一切口出しする親ではなかった。主人を親に紹介したとき、人間性だよね、と言って、主人を気に入ってくれました」と、のろけ話を、享子さんはテレもせず話す。

篤さんは次男であったので、民宿を継ぐことは考えていなかった。一昔前の民宿は、朝から晩まで大忙しであった。「私はとてもそんなことはできない。できれば、民宿の仕事はやりたくなかった」、それが結婚した当時の享子さんの心境であった。

この言葉は、意外であった。スチュワーデスというと、いつも笑顔を決やさず客に接しているというイメージがあるが、享子さんは違っていた。客に不要な愛想笑いをしない人、という印象が強かった。あるいは、営業用のスマイルを振りまく生活に耐えられなくて、このような道を選んだのではないかと私はひそかに想像していたのである。

「おかあさんが病気で入院したとき、夏のシーズンで、すごい人数の予約が入っているわけです。えーっと思いつつながら、民宿の仕事を手伝いました。子どもは小学校の1年生。そのときは、どうなることやら、と思いましたが、周りの方々の協力で何とか乗り切ることができました。そのとき関わった人たちが私に会いに来てくれるじゃないですか。その楽しみみたいなものを感じたのです」。民宿の仕事は、このような偶然がきっかけで始めたのであったが、心が通う出会いの楽しみを覚えてしまった。

私は、過去4回、泉屋に宿泊しているが、民宿内で享子さんの姿をほとんど見かけたことは

ない。顔を合わせるの、送迎時くらいである。泉屋の敷地内には、赤瓦の母屋と離れがあって、離れに享子さんの義母である達子さんが住んでいる。享子さん夫婦は民宿から少し離れた別の場所に居住している。

「今でも宿の主役はおかあさん（達子さん）。私は、ヘルパーさんとの関わりが仕事。今でも、おかあさんが、この宿の中心だと思っています」と、女将であるものの、鮮やかともいえるおさえ方である。

「おかあさんは、『客の声が聞こえなくなったらボケる』と口癖のように言います。自分ですべきことを確立している人です。畑から野菜をとってきて、料理ができる状態にしておくのが自分の仕事だ、と。そして、あとは、ひょうひょうとしています」、これが享子さんから見た義母像である。達子さんもさることながら、享子さん自身もまた、自分ですべきことを確立している人間である。

「親が残してくれたものをいやと言いながらも引き継いだわけですが、この民宿があったから、3人の子どもを大学や専門学校に行かせてあげられた。竹富島の子どもたちは高校になると島を出てアパートを借りるんです。3人の子どもの生活費だけで、普通の人がいただくお手当てがなくなってしまいます。子どもたちが好きな道を歩けたのも、この宿のおかげです」と、子を思う母親としての素顔の一面ものぞかせる。無論、別にご主人の収入源があることは言うまでもない。

泉屋の宿泊料金は、1泊2食付で5,250円である。今時、考えられない安価な値段である。それだけではなく、夕食時には、冷たい飲み物や泡盛の無料サービスがある。定員は16名で、シーズン中は、ほぼ満員。かなりの客を断っているという評判の高い宿である。敷地に余裕があるので増築して収容人員を増やせばいいと思うのに、それはしない。ブーゲンビレアのアーチを潜ると、白砂の庭が広がり、草花に囲まれて伝統的な赤瓦の建物がひかえめに建つ、そんな佇まいを大切にしている。

「物価が上がっているのに宿代を上げないでおこうとしたとき、削るのは、ほかがしていないサービスをやめることです。それは簡単です。食事前の冷たい飲み物と食事中に泡盛のボトルを無料で出すサービスをやめようかと迷ったんですけど、今も続けています」と、話は続く。何たるこだわりであろう。「それは、趣味ですね」と聞き返すと、愉快的な答えが返ってきた。

「昔はオヤジ（昇さん）がいて、私が独身時代に来た頃は、飲みたくもない日もあるのに、『飲め!』と言われ、ゆっくりしたい日もあるけれど、『来い!』と言われ、また今日もか、と思いつきながら、つきあってしまうのです。そんな雰囲気宿でした。家に帰って一人になったとき、また竹富に帰りたいなあ、と思うのです。冷たい飲み物や泡盛のサービスはその名残りなんです。あれをやめようと思ったとき、主人が、オヤジのように、毎晩、宴会もできないので、せめての気持ちだからあれはなくさないでおこう、ということで細々続けているんですけど…」と、享子さんははじめて微笑んだ。

先代のオヤジ・上勢頭昇（故人、元竹富町教育委員長）は、喜宝院蒐集館を設立した上勢頭亨（故人）の弟に当たり、前述した「竹富島を生かす会」（昭和47年設立）の代表者であった。大手観光資本の流入を拒み、「金は一代、土地は末代」のプラカードを立てて、兄の亨とともに住民運動の先頭に立った人として知られる。民宿泉屋は、聞くところによると、まだ竹富島

に宿泊施設の整っていなかった時代、勉学のために竹富島を訪れる学生などを善意で泊めているうちに、やがて看板を上げて民宿を始めるようになった、ともいう。オヤジ・上勢頭昇が若い旅人をつかまえて、「飲め！」と泡盛をすすめる古きよき時代の民宿の姿が彷彿される。

この話は、享子さん、また昇の妻にあたる達子さんの口からは、一言も聞いたことがない。あくまでも周囲の人からの話である。達子さんが寝起きしている泉屋の離れの前に、小さな黒ミカゲの石版が置かれている。そこには、「竹富島のこころ」という小文が記されている。「輝かしい自然と礼儀正しい人々が仲よく美しく暮らしている竹富島…」で始まる旅人へのメッセージは、「竹富島を生かす会」のものである。毎朝、ひょうひょうとした姿で庭掃除をする達子さんは、この言葉をながめて、今は亡き夫のことを思い出しているのではないか。

享さんが岡山で暮らしていたのは21歳までで、竹富島での生活がその年月を超えた。「20代の頃って、今が一番いいだろう、今よりいい時はないだろうと思って東京で生活をしていました。30歳になった時の子育てってすごい楽しかったんですよ。40歳になったらもっと楽しくって。子どもがいなくなった時、後悔するかなあとと思ったんですけど、今も楽しいんですよ。物事を前向きに捉える享さんの性格が現れた言葉である。また、「竹富島の暮らしでは、冠婚葬祭、祭り、子供会と、仕事外のつきあいの時間がすごくありますよね。閑だな、と思うことが一時もありません」とも話した。これと同じことを、友利由紀さんも言っており、張り合いのある島の暮らしの一端が伝わってくる。

「竹富島は少ない人数で生活をしているところなので、祭りにしろ、何にしろ、大変。伝えていきたいことは、“うつぐみの心”ですかね。“うつぐみの心”をちゃんと育てて、鍛えて、社会に出ていってもらいたい、と思います。島の人の中でも、今、“うつぐみの心”なんてないよ、と言う人もいますけれど、どこかの家に何かあったとき、皆がさーと集まってきます。誰かに言われなくてもできる。凄いなあ、と思いますね」。竹富島の精神文化である「うつぐみの心」は、島に嫁いできた人々の心の中にも深く根を下ろし、受け継がれているのである。

「竹富島で暮らしていると、皆に支えられて生きている、とつくづく思いますね。言わなくても物事が動いていくんです。そんな気持ちを皆がもっている島です、竹富は。竹富島に来てよかったな、と思っています」と、享さんは話を締めくくった。

おわりに

私が教えを受けた民俗学者の宮本常一先生は、「日本の伝統文化・自然など、もろもろの良さについては何らかの形で残す工夫をしなければならない。なぜなら、それこそが旅情の原点ともなるものであるからである」、「観光を通じて地域文化を発展させ、地方に自信を持たせ、従来の地方と中央の従属的な関係に風穴を開かせたい」、「地域の発展というものは、本当に自分たちの土地をどうしたらよいかという人たち、真剣に自分たちの土地の問題を、自分たちで解決しようという人たちが育ってこない限り、ありようがない」と説いていた。

本稿をまとめようと思った原点が、その師からの教えの中にある。

これまで、地域文化の振興については何度かまとめてきたが、観光文化という視点から地域社会の在り方をまとめてみたことはなかった。私にとっての沖縄県竹富島は、今は亡き恩師が1960年代に問題提起したことを改めて考え直すにふさわしいフィールドであった。

1970年代初期、若者の多くは旅に出て、高度経済成長下かろうじて地域に残されていた自然・

文化に出会い、そしてその地に生きる人々と触れ合い、その体験を通じて自己の成長の糧とした。当時、そのような旅人とそれを迎え入れる観光地が日本各地に満ち溢れていた。そして、一種独特な空気を醸し出していた。私もその中に身をおいた一人である。

竹富島を訪れて驚いたことは、その空気を今なおもち続けている、という事実であった。旅する人が互いに声をかけあい、また、見知らぬ若者を土地の人々が迎え入れ、真剣に語りかけてくれる気分が充満しているのである。

それは、すでに遠い昔、忘れ去ってしまった空気である、と私は思い込んでいた。竹富島に流れるその空気が信じがたかった。なぜ、そのような空気が今日まで受け継がれているのだろうか。また、人々のどのような思いがそうさせているのであろうか。理屈抜きでそのことを知りたい、と思った。そして、それを通じて観光文化を考えてみたい、と思った。

竹富島の魅力は、そこでどれだけ時間を過ごしたかで、受け取り方が違ってくる。その捉え方については、本論で整理したとおりである。旅行者からみた「ゆったり時間が流れている島」という印象は、生活者からみると「島での暮らしは行事に追われ、けっこう忙しい」という言葉に変わる。その生活者の言葉は、「生きていて手ごたえを感じる土地が竹富島である」という意味として受け取ることができる。

また、「ほっておいて和やかな島ができるわけじゃないんです。我々は、水面下でもがいているんです」の一言には、良好な地域社会を創っていかうとする苦勞と、困難を乗り越えようとする意思が感じられる。「安心な地域をつくるために、我々現役世代が必死になって水面下でもがくことが必要です」。これは、まさに地域づくりの実践を通して発せられた言葉である。

竹富島では、地元の人に混じって、他所から訪れた人々が、島の観光や地域づくりに参加し、これを盛り上げている。その背景には、島に根付いた精神文化「うつぐみの心」が作用している。そして、その心は、新たに島の住民となった人々の間にも共有され、それを価値あるものとして、次世代に引き継ぐ努力がなされている。

結論を一言で言うと、「きちんとした生き方をもっている人が住んでいる島、それが竹富島であり、その人々が発散する魅力が、豊かな自然環境、島に伝わる歴史・伝統文化と一体となって、島の空気を作り出している。それが多くの旅人を魅了し、竹富島の観光文化を築いている」と、まとめることができる。観光文化の振興を考える上において竹富島に学ぶべきことは、まさにこの点にある、と私は受け止めている。

謝 辞

本稿は、愛知淑徳大学研究助成成果報告の一部である。研究費をいただいた大学当局に感謝申し上げるとともに、調査研究を実施するに当たり、インタビュー調査にご協力いただいた上勢頭芳徳さん（喜宝院蒐集館長）、石垣安志先生（竹富小中学校校長）、古堅節さん（竹富島在住）、上勢頭享子さん（泉屋女将）、友利由紀さん（竹富島在住）、岡田麻実さん（泉屋）、高橋友美さん（泉屋）、梅井伸子さん（泉屋）、奥崎奈々さん（泉屋）、近藤亜祐美さん（愛知淑徳大学）、福本かおりさん（愛知淑徳大学）、森下愛子さん（愛知淑徳大学）、芳永美咲さん（愛知淑徳大学）をはじめ、我々一行を暖かく迎えてくださった上勢頭篤さん（泉屋の主）、上勢頭達子さん（泉屋のオバァ）、三浦彰徳さん（竹富島在住）、大底勝子さん（竹富島在住）ならびに竹富町教育委員会・ゆがふ館ほか関係者各位に感謝申し上げたい。